

菊水健史（社会内分泌） 永澤美保（同調的共生） 茂木一孝（社会神経科学）
今野晃嗣（動物社会認知科学） 久世明香（動物臨床行動学）

研究の背景

- ・ イヌはヒトとの共生の歴史において、ヒトに対する高い感受性を獲得し、その能力を用いてヒトとスムーズな生活を送ることができると考えられている。
- ・ しかしイヌの高い認知能力において、「どのようなメカニズム」が存在するかは不明である。
- ・ 一つの仮説として、ヒトの内的状態（意図や感情）による身体の微細な変化に関して高い感受性を有していることが考えられている（図1）。
- ・ イヌはこの微細な変化を認知し、次の行動の選択を学習する（強化学習）ことで、スムーズなコミュニケーションが成立すると考えられる。

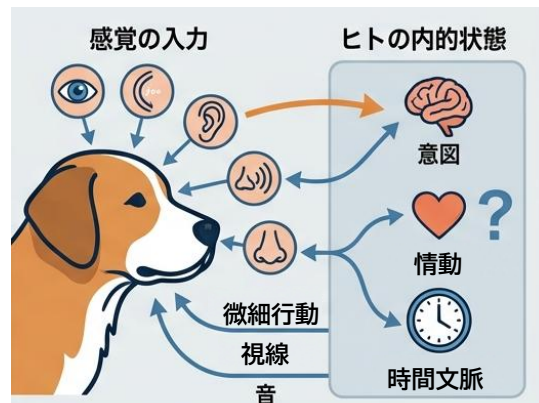


図1：イヌの飼い主の内的状態の推測

アプローチ

- ・ 飼い主（学生）がまず明示的な指示をイヌに提示し、イヌがその指示に応じて正解を選択することを学習する。
- ・ 次に明示的な指示をやめ、指示を出す動きをイメージする場面でのイヌの正答率を測定する（図2、A手がかりあり群）。
- ・ 非明示的な指示で好成績のイヌにおけるB手がかりなしの対照実験を行う。
- ・ イヌを飼育している学生さんが自宅で実験し、最終テストを大学で実施する。

期待される結果

- ・ イヌがなぜヒトとのスムーズなコミュニケーションを取ることができるのかがわかります。
- ・ イヌとヒトとのやり取りにおけるイヌの学習能力が明らかになります。
- ・ イヌの個体差や犬種差が見出させる可能性があり、個体差の要因を知ることができます。
- ・ 研究成果は、ファシリティドッグなどの作業犬の育成にも活用できる可能性があります。

募集方法

- ・ 介在動物学研究室のゼミに参加してもらい、最近の知見や研究の進め方に関して学んでもらいます。毎週3回、朝8時から行います。
- ・ 本実験は、**イヌを飼っており、自宅で実験可能な学生のみが参加できます（募集は5 - 8名）**。
- ・ グループとして研究活動しますので、協力しながらできる力が必要になり、それが養われます。
- ・ ものすごいチャレンジングなテーマです。強い気持ちで根気強くやってみたい学生さん、是非どうぞよろしくおねがいします！



図2：具体例な実験内容